

母親の就労状況別にみた食育に対する意識および実施状況

Awareness and implementation status of dietary education by mother's employment status

上島 寛之 Hiroyuki kamishima
(家政学部管理栄養学科)

松田 優花 Yuka matsuda
(緑が丘こども園)

浅田 英嗣 Eiji asada
(家政学部管理栄養学科)

石川 桂子 Keiko ishikawa
(家政学部管理栄養学科)

抄 録

【目的】食育のアプローチ方法の模索を目指して就労状況別に母親の食育に対する意識および実施状況を把握することを目的とした。

【方法】2019年にA県G市で行われた食育イベントに参加した母親を対象とした。自記式の調査票を用いて就労状況および食育に対する意識と実施状況を聞きとり、母親の就労状況をフルタイム群、パート・アルバイト群、無職群の3群に分けて群間比較を行った。

【結果】朝食と夕食の摂食状況に有意な群間差は無かった。共食状況ではすべての群で母親が最も高い割合を示し、祖母との共食の有無で有意な群間差が確認された。気を付けて実践している食育ではすべての群で「栄養バランス」が最も高い割合を示し、「食事の時の会話・楽しい食事」と「衛生面」で有意な群間差が確認された。食意識では「食材の旬」に関する2項目で有意な群間差が確認された。

【考察】栄養や献立バランスについては、就労状況に関係なくアプローチできる可能性が高いと考える。フルタイムの母親には調理などの家事時間を短縮し、子どもを巻き込んだ食育の実践に繋がるアプローチ、パート・アルバイトの母親には食育に関する知識や有用性を訴えるアプローチが有効である可能性が高いと考える。

キーワード

母親 mother 就労状況 employment status 食育 dietary education

目 次

- 1 緒言
- 2 方法
- 3 結果
- 4 考察

1 緒言

第4次食育推進基本計画において、「家族が食卓を囲んで共に食事をとりながらコミュニケーションを図ることは食育の原点であり、共食を通じて、食の楽しさを実感するだけでなく、食や生活に関する基礎を習得する機会にもなっていく」とされている¹⁾。また森脇ら(2009)によると、共食頻度の高い保護者は、総じて食生活が良好であり、食生活に関する知識や意識が高く、それが子どもの食生活を良好に

していると報告されている²⁾。

独立行政法人労働政策研究・研修機構が2018年に行った調査では、末子が18歳未満のふたり親世帯の母親の就業率が73.1%と年々上昇傾向³⁾となっており、厚生労働省委託調査として行われた出産・育児を機に離職し、再就職した人を対象に行ったインターネット調査でも、正社員の就労意向は69.5%と高い値を示している⁴⁾。さらに、厚生労働省が行った国民生活基礎調査2019(令和元)年の末子の年

年齢階級にみた母親の仕事の状況の年次推移において、正規、非正規ともに上昇傾向であり、仕事無しはすべての年齢階級で低下している⁵⁾。これらのことから今後も母親の就労率が上昇すると考えられる。中津井ら(2016)によると小学生・中学生とその保護者を対象とした調査において、家事専業の母親は、食事を作る時の意識が高く、朝食を食べたり野菜をしっかりと食べたり、よく噛んで食べるなど保護者の食生活や子どもの食生活が良いことが報告されている⁶⁾。

藤本(2005)によると男女間に就労格差がない場合であっても、子どもと一緒に夕食を食べる頻度、勉強や料理を教える頻度は女性の方が高いことが報告されている⁷⁾。しかし母親の就労状況と子どもへの食育に関する報告はまだ十分とはいえない^{6,8-10)}。そこで本研究では、母親の就労状況に応じた食育のアプローチ方法の模索を目指して、就労状況別に母親の食育に対する意識および実施状況を把握することを目的として食育イベントで調査を行った。

2 方法

2.1 対象者および調査方法

A県G市で行われた食育イベントに参加した母親を対象とし、無記名・自記式のアンケート調査を行った。調査は、2019年1月25日、26日の2日間で行った。調査票に記入漏れがあった者、不良回答の特徴の1つである規則的回答があった者¹¹⁾は解析から除外することとした。本研究は、ヘルシンキ宣言の基本原則に則り実施した。調査票を配布する際に調査内容と、その説明及び研究に使用する旨を説明し、調査票はその場で回収した。調査票の回収をもって同意を得たものとした。

2.2 調査項目

調査票は、文部科学省の平成30年度子供の学習費調査¹²⁾、京丹後市のこども園・保育所食生活アンケート¹³⁾、吉田(2016)の開発した食意識尺度¹⁴⁾、村井(2019)の小学生保護者を対象とした研究¹⁵⁾、を参考に①母親の属性(年齢、就労状況、子どもの性別と年齢)、②摂食状況、③共食状況、④気を付けて実践している食育、⑤食意識の5項目からなるものを作成・使用した。なお、作成した調査票は本研究の対象者とは異なる母親の協力を得て予備調査を行い、不備等が無いことの確認を行った。

①母親(対象者)の属性

母親の年齢は空欄に記入する方式で回答を得た。就労状況については、「フルタイムで働いている」「パート・アルバイト等で働いている」「フルタイム又はパート・アルバイト等だが、現在産休・育休・介護休業中」「現在は仕事をしていない」「これまでに就労をしたことがない」の5件法を用いて回答を得た。子どもの年齢と性別は子どもごとに回答を得た。

②摂食状況

「お子さんは、(1)朝食と(2)夕食を、1週間に何日程度食べていますか」という問いに「ほぼ毎日」「週に4~5日」「週に2~3日」「ほとんど食べない」「わからない」の5件法を用いて回答を得た。

③共食状況

「お子さんは、(1)朝食と(2)夕食を誰と食べていることが多いですか」という問いに「母親」「父親」「祖母」「祖父」「きょうだい」「子どものみ」の選択肢から当てはまるものすべてに丸をつけてもらった。

④気を付けて実践している食育

「お子さんの食事について気を付けていることは何ですか」という問いに「栄養バランス」「食事マナー」「できるだけ手作り」「旬の食材を使う」「地元の食材、農薬等の少ないものを選ぶ」「食品表示を見る」「衛生面」「行事食・郷土料理を伝える」「食事の時の会話・楽しい食事」の中から当てはまるものすべてに丸をつけてもらった。

⑤食意識

「食を楽しむ」(9問)、「食事づくり」(11問)、「食とマナー」(11問)の各項目の問いに「とても関心がある」「やや関心がある」「どちらともいえない」「あまり関心がない」「全く関心がない」の5件法を用いて回答を得た。

2.3 統計解析

就労状況の群分けについては「フルタイムで働いている」を「フルタイム群」、「パート・アルバイト等で働いている」を「パート・アルバイト群」、「フルタイム又はパート・アルバイト等だが、現在産休・育休・介護休業中」「現在は仕事をしていない」「これまでに就労をしたことがない」を「無職群」として3群に分類した。

朝食および夕食の摂食状況については「ほぼ毎日」を「欠食なし」、「週に4~5日」「週に2~3日」「ほとんど食べない」「わからない」を「欠食あり」とした。

食意識については、「とても関心がある」を5点「やや関心がある」を4点「どちらともいえない」

を3点「あまり関心がない」を2点「全く関心がない」を1点として合計点数を算出した。また、「食を楽しむ」(9問)、「食事づくり」(11問)、「食とマナー」(11問)の各項目においても同様に点数を算出し解析を行った。

連続尺度については、Smirnov-Grubbs検定で外れ値を同定し、Shapiro-Wilk検定、Bartlett検定を用いて正規性および等分散性を確認した。正規性と等分散性が確認されたものは一元配置分散分析、正規性が確認されなかったものはKruskal-Wallis検定を用いた。離散尺度については、 χ^2 検定を行った。分布の偏りにより、 χ^2 検定ができない場合は、Fisherの正確確率検定を行った。統計分析には、EZR(自治医科大学付属さいたま医療センター、Ver1.55)¹⁶⁾を用い、有意水準は5%とした。

3 結果

調査の同意が得られた135人のうち、調査票に不備や記入漏れがあった22人を除外し、有効回答人数は113人となった。また、解析対象者は母親の年齢で外れ値と同定された1人を除いた112人(解析対象率83.0%)とした。

母親の就労状況は、「フルタイムで働いている」が25人(22.3%)、「パート・アルバイト等で働いている」が42人(37.5%)、「フルタイム又はパート・アルバイト等だが、現在産休・育休・介護休業中」が11人(9.8%)、「現在は仕事をしていない」が33人

(29.5%)「これまでに就労をしたことがない」が1人(0.9%)であった。母親の平均年齢±標準偏差は、36.9±5.0歳、母親1人に対する子どもの人数の最頻値は2人であり、どちらも母親の就労状況による有意差は無かった。また、表には示していないが、子どもの性別も群間差はみられなかった。末子の年齢の中央値は、有意差がみられ、パート・アルバイト群が5歳で他の群と比較して高かった。また、無職群は他の群と比較して末子の年齢幅が広がった(表1)。

朝食は、112人のうち107人(95.5%)が「ほぼ毎日」食べていた。夕食は112人のうち、110人(98.2%)が「ほぼ毎日」食べていた。母親の就労状況による朝食および夕食の摂取状況に有意差はみられなかったが、無職群は朝食、夕食ともに「欠食あり」に該当する者はいなかった(表2)。

朝食で最も高い共食割合を示したのは母親であり、すべての就労状況で同様の結果が得られたが、無職群の共食割合が最も高かった。子どものみで食べている人は5人であり母親の就労状況による差は無かったが、祖母との共食状況で有意差が確認された。また、夕食で最も高い共食割合を示したのは、朝食同様母親の107人(95.6%)であり、すべての就労状況で同様の結果が得られた。子どものみで食べている人はおらず、祖母との共食状況で有意差が確認された(表3)。

表1 母親(対象者)の基本属性

	全体(n=112)	フルタイム群(n=25)	パート・アルバイト群(n=42)	無職群(n=45)	p値
年齢(歳) ^{a)}	36.9 (5.0)	36.3 (5.0)	37.1 (5.4)	37.1 (4.8)	0.759
子どもの人数(人) ^{b)}					
1人	38 (33.9%)	8 (32.0%)	14 (33.3%)	16 (35.6%)	
2人	51 (45.6%)	13 (52.0%)	18 (42.9%)	20 (44.4%)	0.939
3人以上	23 (20.5%)	4 (16.0%)	10 (23.8%)	9 (20.0%)	
末子の年齢(歳) ^{c)}	4 [2-6]	3 [2-4]	5 [3-6]	3 [1-6]	0.014

平均値(標準偏差) n(%) 中央値[25%-75%]

a)一元配置分散分析

b) χ^2 検定

c)Kruskal-Wallis検定

表2 母親(対象者)の就労状況別の朝食および夕食の摂取状況

	全体(n=112)	フルタイム群(n=25)	パート・アルバイト群(n=42)	無職群(n=45)	Fisherの正確確率検定 p値
朝食					
欠食なし	107 (95.5%)	24 (96.0%)	38 (90.5%)	45 (100%)	
欠食あり	5 (4.5%)	1 (4.0%)	4 (9.5%)	0 (0%)	0.076
夕食					
欠食なし	110 (98.2%)	24 (96.0%)	41 (97.6%)	45 (100%)	
欠食あり	2 (1.8%)	1 (4.0%)	1 (2.4%)	0 (0%)	0.515

n(%)

表3 母親(対象者)の就労状況別の朝食および夕食の共食状況

		全体(n=112)	フルタイム群(n=25)	パート・アルバイト群(n=42)	無職群(n=45)	Fisherの正確率検定 p値
朝食						
母親 ^{a)}	共食なし	19 (17.0%)	6 (24.0%)	9 (21.4%)	4 (8.9%)	0.164
	共食あり	93 (83.0%)	19 (76.0%)	33 (78.6%)	41 (91.1%)	
父親 ^{a)}	共食なし	77 (68.8%)	17 (68.0%)	30 (71.4%)	30 (66.7%)	0.869
	共食あり	35 (31.2%)	8 (32.0%)	12 (28.6%)	15 (33.3%)	
祖母	共食なし	105 (93.8%)	22 (88.0%)	38 (90.5%)	45 (100%)	0.047
	共食あり	7 (6.2%)	3 (12.0%)	4 (9.5%)	0 (0%)	
祖父	共食なし	109 (97.3%)	25 (100%)	39 (92.9%)	45 (100%)	0.061
	共食あり	3 (2.6%)	0 (0%)	3 (7.1%)	0 (0%)	
きょうだい ^{a)}	共食なし	65 (58.0%)	19 (76.0%)	20 (47.6%)	26 (57.8%)	0.074
	共食あり	47 (42.0%)	6 (24.0%)	22 (52.4%)	19 (42.2%)	
こどものみ	共食なし	107 (95.5%)	23 (92.0%)	40 (95.2%)	44 (97.8%)	0.450
	共食あり	5 (4.5%)	2 (8.0%)	2 (4.8%)	1 (2.2%)	
夕食						
母親	共食なし	5 (4.5%)	2 (8.0%)	1 (2.4%)	2 (4.4%)	0.634
	共食あり	107 (95.6%)	23 (92.0%)	41 (97.6%)	43 (95.6%)	
父親 ^{a)}	共食なし	70 (63.2%)	17 (68.0%)	27 (64.3%)	26 (57.8%)	0.701
	共食あり	42 (36.8%)	8 (32.0%)	15 (35.7%)	19 (42.2%)	
祖母 ^{a)}	共食なし	95 (85.1%)	19 (76.0%)	33 (78.6%)	43 (95.6%)	0.020
	共食あり	17 (14.9%)	6 (24.0%)	9 (21.4%)	2 (4.4%)	
祖父	共食なし	101 (90.4%)	22 (88.0%)	35 (83.3%)	44 (97.8%)	0.056
	共食あり	11 (9.6%)	3 (12.0%)	7 (16.7%)	1 (2.2%)	
きょうだい ^{a)}	共食なし	62 (55.3%)	16 (64.0%)	20 (47.6%)	26 (57.8%)	0.408
	共食あり	50 (44.7%)	9 (36.0%)	22 (52.4%)	19 (42.2%)	
こどものみ	共食なし	112 (100%)	26 (100%)	43 (100%)	45 (100%)	—
	共食あり	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	

n(%)

a) χ^2 検定

表4 母親(対象者)の就労状況別の気を付けて実践している食育

		全体(n=112)	フルタイム群(n=25)	パート・アルバイト群(n=42)	無職群(n=45)	χ^2 検定 p値
栄養バランス	なし	25 (22.3%)	5 (20.0%)	10 (23.8%)	10 (22.2%)	0.936
	あり	87 (77.7%)	20 (80.0%)	32 (76.2%)	35 (77.8%)	
食事マナー	なし	44 (39.3%)	13 (52.0%)	13 (31.0%)	18 (40.0%)	0.231
	あり	68 (60.7%)	12 (48.0%)	29 (69.0%)	27 (60.0%)	
できるだけ手作り	なし	70 (62.5%)	14 (56.0%)	28 (66.7%)	28 (62.2%)	0.683
	あり	42 (37.5%)	11 (44.0%)	14 (33.3%)	17 (37.8%)	
旬の食材を使う	なし	77 (68.8%)	16 (64.0%)	33 (78.6%)	28 (62.2%)	0.219
	あり	35 (31.3%)	9 (36.0%)	9 (21.4%)	17 (37.8%)	
地元の食材・農薬等の 少ないものを選ぶ	なし	95 (84.8%)	21 (84.0%)	35 (83.3%)	39 (86.7%)	0.846
	あり	17 (15.2%)	4 (16.0%)	7 (16.7%)	6 (13.3%)	
食品表示を見る	なし	96 (85.7%)	19 (76.0%)	39 (92.9%)	38 (84.4%)	0.154
	あり	16 (14.3%)	6 (24.0%)	3 (7.1%)	7 (15.6%)	
衛生面	なし	79 (70.5%)	14 (56.0%)	35 (83.3%)	30 (66.7%)	0.046
	あり	33 (29.5%)	11 (44.0%)	7 (16.7%)	15 (33.3%)	
行事食・郷土料理を伝える	なし	94 (83.9%)	19 (76.0%)	37 (88.1%)	38 (84.4%)	0.424
	あり	18 (16.1%)	6 (24.0%)	5 (11.9%)	7 (15.6%)	
食事の時の会話・楽しい食事	なし	66 (58.9%)	20 (80.0%)	23 (54.8%)	23 (51.1%)	0.049
	あり	46 (41.1%)	5 (20.0%)	19 (45.2%)	22 (48.9%)	
特にない ^{a)}	なし	108 (96.4%)	25 (100%)	41 (97.6%)	42 (93.3%)	0.539
	あり	4 (3.6%)	0 (0%)	1 (2.4%)	3 (6.7%)	
実践していると回答した項目数 ^{b)}		3 [2-4]	3 [2-4]	2 [2-4]	3 [2-5]	0.496

n(%) 中央値[25%-75%]

a) Fisherの正確率検定

b) Kruskal-Wallis検定

気を付けて実践している食育は、3群とも「栄養バランス」が最も多く、次いで「食事マナー」が多かったが、3番目に多かったのはフルタイム群が同数で「衛生面」と「できるだけ手作り」、パート・アルバイト群と無職群が「食事の時の楽しい会話・楽

しい食事」であり、「衛生面」と「食事の時の会話・楽しい食事」で有意差が確認された。また、実践していると回答数の中央値はフルタイム群と無職群は3個、パート・アルバイト群は2個であった。(表4)。

表5 母親(対象者)の就労状況別の食意識の点数

	全体(n=112)	フルタイム群(n=25)	パート・アルバイト群(n=42)	無職群(n=45)	Kruskal-Wallis検定 p値
食を楽しむ小計点	41.5 [38.0-44.0]	42.0 [40.0-45.0]	41.0 [38.0-43.0]	42.0 [39.0-44.0]	0.233
「おいしいね」などおいしさを分かち合うことについて	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.376
お子さんに料理をしているところを見せることについて	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.377
「皆と食べるおいしいね」など共に食べることの喜びを伝える事について	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.861
ご自身が好きな食べ物を食べるとき、美味しそう顔で食べる事について	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.500
お子さんが食事をするとき、お子さんが自分で食べることを尊重することについて	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.680
食事を通してお子さんに愛情を表現することについて	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.212
食べものを作ってくれる人に感謝の気持ちをもつことについて	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.120
食事を楽しむために、きちんと座って食べる事について	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.818
食事のとき、お子さんと一緒に「いただきます、ごちそうさま」の挨拶をすることについて	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.8-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	0.391
食とマナー小計点	48.0 [44.0-52.0]	47.0 [44.0-52.0]	48.0 [43.5-51.0]	50.0 [44.0-52.0]	0.500
1回の食事に主食・主菜・副菜をそろえることについて	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.395
食事の前にお腹が空くリズムをつけさせることについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.221
朝食を食べさせることについて	5.0 [5.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	0.862
スプーンや箸の使い方を身につけさせることについて	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.667
食卓にマットや花を飾るなど、楽しい雰囲気作りをすることについて	3.0 [3.0-4.0]	3.0 [3.0-4.0]	3.0 [3.0-4.0]	4.0 [3.0-4.0]	0.373
決まった時間に決まった量のおやつを食べさせることについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [3.0-5.0]	4.0 [3.0-4.5]	4.0 [4.0-5.0]	0.350
食器を置く位置「茶碗(左)や汁椀(右)」などについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.456
ご飯が出来たとき、明るい声で呼びかけることについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.739
食事の前に手洗いをさせることについて	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.771
食事のときにひじをついたりさせない	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	5.0 [5.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.496
食事(朝・昼・夕)の時間を守る事について	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [3.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.322
食事づくり小計点	45.0 [42.0-48.5]	45.0 [43.0-50.0]	44.0 [40.0-47.0]	47.0 [42.0-50.0]	0.173
お子さんと一緒に食材を買いに行くことについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [3.5-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.334
お子さんと一緒に野菜を育てることについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [3.5-4.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.303
お子さんと一緒に料理をすることについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.929
郷土料理を家庭の食卓に取り入れることについて	4.0 [3.0-4.0]	4.0 [3.0-4.0]	3.5 [3.0-4.0]	4.0 [3.0-4.0]	0.528
旬の食材を取り入れることについて	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	0.039
お子さんに料理を盛り付けてもらうことについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-4.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.720
お子さんと育てた食べもの(野菜など)を使って料理することについて	4.0 [4.0-5.0]	5.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.384
お子さんに食材の色や形、香りなどを感ぜさせることについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.436
地元(同県)で作られた食べものを買うことについて	4.0 [3.0-5.0]	4.0 [3.0-5.0]	4.0 [3.5-4.5]	4.0 [4.0-5.0]	0.910
お子さんと、畑や農場など食べものを育てている場所に行くことについて	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [3.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [3.0-5.0]	0.367
お子さんに食べものの旬について話をする事について	4.0 [4.0-5.0]	4.0 [4.0-5.0]	3.5 [3.0-4.0]	4.0 [4.0-5.0]	0.039
合計点	135.0 [123.0-143.0]	135.0 [127.0-142.0]	133.0 [122.0-139.0]	137.0 [123.0-144.0]	0.261
中央値[25%-75%]					

食意識の合計点の中央値は無職群がもっとも高い値を示し、パート・アルバイト群が最も低い値を示した。フルタイム群では「食を楽しむ」に該当するすべての項目で中央値が5.0であった。また、「食を楽しむ」と「食事づくり」はパート・アルバイト群がもっとも低い値を示し、「食とマナー」はフルタイム群がもっとも低い値を示した。項目ごとの検討では、「旬の食材を取り入れることについて」と「お子さんに食べものの旬について話をする事について」で有意差がみられた。(表5)

4 考察

本研究は、A県G市で行われた食育イベントに参加した母親を対象として、母親の就労状況に応じた食育のアプローチ方法の模索を目指して、就労状況別に母親の食育に対する意識および実施状況を把握することを目的として食育イベントで調査を行った。

朝食を「ほぼ毎日」摂取している人の割合は大きな差は無いが、無職群(100%)がもっとも高く、パート・アルバイト群(90.5%)がもっとも低かった。また、

夕食を「ほぼ毎日」摂取している人の割合はどの就労状況も高い値を示したが、無職群(100%)がもっとも高かった。これらの要因のひとつに就労による時間的余裕の差が考えられる。古谷ら(2017)の保育所に通う3から5歳児の母親を対象にした調査において、朝食で最も多く摂取された食品は「パン」、次いで「乳製品」「牛乳」であり、「パンと牛乳・乳製品」等の手軽な朝食内容の子どもが77.9%いたと報告されている¹⁷⁾。冬木ら(2019)の1歳半検診を受診した幼児の保護者とこども園に通園する保護者を対象に行った調査において朝食で副菜(野菜料理)の摂取割合が低く、パンやシリアルのみ、それに牛乳やヨーグルトをつけるといった簡素な朝食を摂取する事例が多数報告されている¹⁸⁾。また、朝食を摂食していると回答した人の中には厚生労働省の欠食の定義¹⁹⁾に当てはまる人もいると考えられる。さらに、会退ら(2011)が都内の幼稚園および幼保一元化施設に通う園児をもつ保護者を対象に行った調査結果によると、就寝時間が遅くなってしまった場合、起床時間も遅くなり、登園時刻までに十分な睡眠がとれず

欠食になりやすいと考えられるという報告²⁰⁾や、守田ら(2018)の熊本県内の公立小学校及び公立中学校を対象とした調査において朝食を必ず毎日食べる人は就寝時刻や起床時刻が早く睡眠時間が長いことや、テレビ・ゲームの時間やインターネットの時間が短いという報告がある²¹⁾。また、久保(2014)は深夜業を含む交替制勤務者は一貫して増加傾向であると報告している²²⁾。そのため、今後は朝食の摂食頻度だけではなく母親の就労時間や夜間勤務の有無、食事内容や就寝および起床時刻、睡眠時間なども確認することで就労状況別の朝食に関するアプローチ方法の模索に繋がると考えられる。

共食状況は全ての就労状況で母親が最も多く、子どものみで食事を食べさせている人の割合は低かった。中津井ら(2016)が小学生と中学生の保護者(料理の作り手)を対象にした調査において子どもの毎日の食事を担当する保護者は、母親が96.2%を占めていた⁶⁾。このことから、今回も母親との共食が最も多くなったと考えられる。今回、母親との共食状況は無職群と比較すると、フルタイム群とパート・アルバイト群では低い値を示した。しかしながら、フルタイム群とパート・アルバイト群では、無職群と比較して祖母や祖父と共食をしている人が多かった。後藤ら(2006)の宮城県内の幼稚園に在籍する幼稚園児の保護者を対象に行った調査において幼稚園児の食事に関しては両親を除いた場合、祖母などが食事の担い手としての一定の役割を果たしているとの報告²³⁾や、Tenjin Kら(2019)の祖父母と一緒に住んでいると両親が仕事で忙しくても祖父母と一緒に食事を食べているという報告がある²⁴⁾。余田ら(2018)の分析において、専業主婦よりも有業の母親の方が祖父母からより多くの育児支援を受けているという報告がある²⁵⁾。佐々ら(2003)が小学5・6年生を対象に行った調査において子どもだけよりも大人と一緒に食事をすることが、子どもの食物摂取・健康状態・食意識・食態度・食知識により栄養を及ぼしていると報告されている²⁶⁾。また祓川ら(2011)が小学5年生と中学2年生を対象に行った調査においても「家族全員」および「家族(大人)の誰かと」食べている者は、自分の健康と食生活について意識している者が多く、共食と児童生徒の健康や食生活に対する意識の高さが関連していると報告されている²⁷⁾。これらのことから、共食者だけでなく、祖父母との同居の有無や祖父母からの育児支援の有無・内容を確認することで就労状況別に共食に関するアプローチ

方法の模索に繋がると考えられる。

食事で気を付けて実践していることは、すべての就労状況で「栄養バランス」が最も多かった。冬木ら(2019)は母親の帰宅時間の遅さは子どもの栄養や献立バランスといった食習慣に影響を及ぼしていないと報告している¹⁸⁾。これらのことから、栄養や献立バランスについては、就労状況に関係なくアプローチできる可能性が高いと考えた。一方で、「食事の時の楽しい会話」と「衛生面」は有意差がみられた。「食事の時の楽しい会話」は、他と比べて母親のみで行う食育ではなく、子どもを巻き込んで行う食育であり、時間がかかると推測されることから、フルタイム群での割合が低くなったと考えられる。「衛生面」は他の項目と比べて知識を必要とするため、パート・アルバイト群での割合が低くなったと考えられる。

食意識の合計点と各項目の小計点に有意な群間差はみられなかったが、「食を楽しむ」の各項目でフルタイム群はすべて中央値が5.0であった。阿部ら(2016)が2009年に保育所と幼稚園に子どもを通わせている保護者を対象にした調査において、フルタイムと無職の保護者はパート・アルバイトと比べて有意に食育関心度が高く、フルタイムの保護者は無職の保護者と比較して基本的な食のしつけや学習による望ましい食態度形成を保育園や幼稚園に期待していると報告されている²⁸⁾。また、竹下ら(2016)が静岡県の公立保育所の保護者を対象にした調査において幼児に対する食教育を重要と考える母親は食べることを楽しむ意識が高く、食事管理に力を入れ、家族との食卓を重視すると報告されている²⁹⁾。これらのことからフルタイム群は、「食を楽しむ」項目の中央値が高くなったと考える。

今回の調査において、パート・アルバイト群は朝食や夕食の摂食状況や気を付けて実践している食育の数、食意識の合計点が他の群に比べてわずかではあるが低かった。また、「旬」に関する食意識では、有意に他の群よりも意識している母親の割合が低かった。橘ら(2018)の「食習慣と健康に関する女性3世代研究」の対象者のG県に在住する18歳の女子学生を選択し解析を行った調査において、母親の学歴が上がるほど不適切な栄養素数が少なる傾向があることや、母親の最終学歴は、年収や就業状況にも関連し、最終学歴の低さは、健康意識や食生活・健康行動に経済的理由によるマイナスの影響を及ぼすため、本人ひいてはその子の健康格差の要因になり

えるものの一つであると考えられると報告している³⁰⁾。H L Rippin ら(2020)も学歴や所得は食生活と関連があることを報告している³¹⁾。水落(2006)の調査において高学歴であるほど正社員雇用される確率が高くなると報告している³²⁾。これらのことからパート・アルバイトの母親には、食に関する知識や有用性などの教育を行うことが、子どもの食事による影響を及ぼす可能性があると考えられる。まずは給食だよりなどの活用等^{33), 34)}が有効ではないかと考えられる。しかし、今回の調査では母親の最終学歴や結婚・出産前の就労状況について聞いていないため、今後これらの交絡要因を考慮する必要があると考える。

フルタイム群やパート・アルバイト群は無職群と比較して時間の制約が多い可能性も考えられる。Fulkerson ら(2011)の、学童期の子どもを持つ就業している両親を対象に、フォーカスグループ・ディスカッションを実施した調査においては、働いている保護者は食事の準備の時間が限られており、他の仕事を終わらせるために食事の時間を短くしていると報告されている³⁵⁾。このことから、有職の母親は、食事を準備する時間などを負担に感じている可能性があると考えられる。寺田(2014)の1歳児クラスの保護者を対象に行った調査において、「食事づくりのつらさ感」をたずねたところ「苦にならない」と回答した親は全体の2割程度と報告されており³⁶⁾、子どもの食育に対して負担感を感じている可能性があることが考えられる。今回の対象者においても有職のフルタイム群やパート・アルバイト群の母親は他の時間を削り食育を行っている可能性があると考えられる。特にフルタイム群は「食を楽しむ」の各項目で高い得点を得ているが、実践している食育で「食事の時の会話・楽しい食事」を「あり」と回答した者は少なかった。そのため、子どもの食事の準備時間を減らすために、スーパーマーケットで子どもの栄養を考えたお総菜の販売や、作り置きレシピの情報提供³⁷⁾などの食環境整備を進めるとともに、母親の時間があるときに作り置きを行い食事の準備時間を短縮し、子どもとの食事の時のコミュニケーションなどを促すなどのアプローチが効果的であるのではないかと考えられる。

本研究の限界点としては横断調査であり解析対象者の人数が少ないこと、自記式の調査票を用いていることなどが挙げられる。また、食育イベントで調査を行っているため、食育への関心が高い保護者が

多い可能性も考えられる。さらに子どもの年齢によって必要な食育は異なるが、今回パート・アルバイト群は末子の年齢が有意に高く、無職群では末子の年齢幅が他の群よりも大きかった。しかし、母親の就業率は上昇しており、今後も増加すると予想されているが、母親の就労状況と子どもの食育に関する報告はまだ少ないため、今回の調査結果は有用であったと考える。今後は母親の就労意向を確認するとともに縦断的な検討を行っていきたい。

本研究に関して開示すべき利益相反にある企業・組織・団体はない。

引用文献

- 1) 農林水産省：第4次食育推進基本計画, https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyoji/attach/pdf/210331_35-6.pdf, (2022年1月アクセス)
- 2) 森脇弘子, 戎敦子, 前大道教子, 松原知子：3歳児と保護者の食生活と共食頻度との関連, 日本食生活学会誌, 20, 68-73, (2009)
- 3) 独立行政法人 労働政策研究・研修機構：子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査 2018(第5回子育て世帯全国調査), <https://www.jil.go.jp/institute/research/2019/documents/192.pdf>, (2022年1月アクセス)
- 4) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング：労働者アンケート調査結果【厚生労働省委託調査】, https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/dl/h26-02_itakuchousa00.pdf, (2022年1月アクセス)
- 5) 厚生労働省：平成29年国民生活基礎調査, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/dl/02.pdf>, (2022年1月アクセス)
- 6) 中津井貴子, 長坂祐二：保護者（料理の作り手）の就労状況が保護者や児童生徒の食生活等に与える影響, 日本食生活学会誌, 10, 195-202, (2016)
- 7) 藤本哲史：親の就労と親子の同伴行動に関する研究, 南山大学紀要, 81, 161-181, (2005)
- 8) 野末みほ, 石田裕美, 裕野佐也香, 中西明美, 山本妙子, 西信雄, 村山伸子：小学5年生の家庭での食事の手伝いと保護者のゆとり感や子どもの共食の状況との関連, 栄養学雑誌, 73, 195-203, (2015)
- 9) 木田春代, 武田文, 門間貴史, 朴峠周子, 浅沼徹, 藤原愛子, 香田泰子：母親の就業状況別にみた幼児の偏食とその関連要因, 民族衛生, 81, 3-14, (2015)
- 10) 阪野朋子, 瀧日滋野：幼児の母親の就労形態別にみた調理の現状—調理頻度と調理技術, 食意識, 食経験および自己効力感との関連—, 日本家政学会誌, 68, 575-589, (2017)
- 11) 埴淵知哉, 村中亮夫, 安藤雅登：インターネット調査によるデータ収集の課題—不良回答, 回答時間, および地理的特性に注目した分析—, E-journal GEO, 10(1), 81-98, (2015)
- 12) 文部科学省：子供の学習費調査 保護者調査票(第1回提出分),

- https://www.mext.go.jp/content/1268086_02.pdf, (2022年1月アクセス)
- 13) 京丹後市教育委員会事務局子ども未来課：こども園・保育所食生活アンケート,
<https://www.city.kyotango.lg.jp/material/files/group/41/yousiki.pdf>, (2022年1月アクセス)
- 14) 吉田真知子：グループ体験学習による食教育が保護者の行動変容に及ぼす効果,大妻女子大学博士論文第5号,(2016)
- 15) 村井陽子：小学校保護者の食生活に関する調査-主食・主菜・副菜を組み合わせて食べることに関連して-,日本食育学会誌,13(1),23-31,(2019)
- 16) Kanda Y. : Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics, *Bone Marrow Transplant.*48(3),452-458,(2013)
- 17) 古谷佳世,小谷清子,猿渡綾子,青井渉,和田小依里,東あかね：保育所に通う幼児とその母親を対象とした朝食摂取状況調査～男女比較～,日本栄養士会雑誌,60(1),29-38,(2017)
- 18) 冬木春子,佐野千夏：母親の就労が幼児の生活習慣に及ぼす影響,日本家政学会誌,70(8),512-521,(2019)
- 19) 厚生労働省：令和元年国民健康・栄養調査報告,
<https://www.mhlw.go.jp/content/000710991.pdf>,(2022年1月アクセス)
- 20) 会退友美,市川三紗,赤松利恵：幼児の朝食共食頻度と生活習慣および家族の 育児参加との関連,栄養学雑誌,69(6),304-311,(2011)
- 21) 守田真理子,南久則：小中学生の朝食内容と生活リズム及び学習意欲、健康状態の関連性 ～摂取食品数と味噌汁摂取の影響～,日本食育学会誌,12(2),173-182,(2018)
- 22) 久保 達彦：我が国の深夜交替制勤務労働者数の推計,産業医科大学雑誌,36(4),273-276,(2014)
- 23) 後藤美代子,鈴木道子,佐藤玲子,鎌田久仁子,阿部由希：幼稚園児の食事の担い手の実態,栄養学雑誌,64(6),325-329,(2006)
- 24) Tenjin K, Sekine M, Yamada M, Tatsuse T. : Relationship between parental lifestyle and dietary habits of children: a cross-sectional study, *Journal of Epidemiology*,30(6),253-259,(2019)
- 25) 余田翔平,新谷由里子：母親の就業と祖父母からの育児支援：「個体内の変動」と「個体間の差異」の検討(特集人口減少期に対応した人口・世帯の動向分析と次世代将来推計システムに関する総合的研究),人口問題研究,74(1),61-73,(2018)
- 26) 佐々尚美,加藤佐千子,田中宏子,貴田康乃：大人と一緒にの食事が子どもの食意識・食態度・食知識に及ぼす影響,日本家庭科教育学会誌,46(3),226-233,(2003)
- 27) 祓川摩有,佐野美智代,大橋英里,田辺里枝子,五関一曾根正江：小・中学生の食生活への意識と食習慣との関係,栄養学雑誌,69(2),90-97,(2011)
- 28) 阿部稚里,岡田共代,橋本卓也,池田彩子：フルタイム就労の保護者は集団保育施設の食育に対する期待が高い,日本家政学会誌,67(1),28-36,(2016)
- 29) 竹下登紀子,小嶋汐美,大村雅美,白木まさ子：幼児の食・生活習慣・健康についての横断調査～母親の食育への関心の有無による検討～,日本栄養士会雑誌,59(8),24-32,(2016)
- 30) 橘陽子,高橋東生：栄養関連学科18歳女子学生及びその母親を対象にした栄養素摂取状況と母の最終学歴との関連,桐生大学紀要,29,31-41,(2018)
- 31) H L Rippin, J Hutchinson, D C Greenwood, J Jewell, J J Breda, A Martin, D M Rippin, K Schindler, P Rust, S Fagt, J Matthiessen, E Nurk, K Nelis, M Kukk, H Tapanainen, L Valsta, T Heuer, E Sarkadi-Nagy, M Bakacs, S Tazhibayev, T Sharmanov, I Spiroski, M Beukers, C van Rossum, M Ocke, A K Lindroos, Eva Warensjö Lemming, J E Cade : Inequalities in education and national income are associated with poorer diet: Pooled analysis of individual participant data across 12 European countries, *PLOS ONE*,15(5),e0232447,(2020)
- 32) 水落正明：学卒直後の雇用状態が結婚タイミングに与える影響,生活経済学研究,22(23),167-176,(2006)
- 33) 村井陽子,安藤弘行,山崎範子,奥田豊子：主食・主菜・副菜に関する学習プリントが児童の食行動に及ぼす影響—保護者との連携の試み—,日本食育学会誌,10(3),185-193,(2016)
- 34) 堀田千津子,木村友子,内藤通孝：幼稚園児と育児担当者に対する「食育だより」を活用した食育の効果,日本食育学会誌,3(4),335-346,(2009)
- 35) Fulkerson, J.A., Kubik, M.Y., Rydell, S., et al. : Focus groups with working parents of school-age children: What 's needed to improve family meals?, *Journal of Nutrition Education and Behavior*,43,189-193,(2011)
- 36) 寺田恭子：親が抱く「食事づくりのつらさ感」をサポートする地域の役割と課題—「1歳6か月児健診時の子育て当事者調査」結果からの考察—,日本家政学会誌,65(2),64-72,(2014)
- 37) 松本恵子,宮地めぐみ：野菜直売所およびスーパーマーケットにおける食育実施活動の試み,美味技術学会誌,14(1),11-18,(2015)

(原稿受理年月日：2022年1月11日)